



嶋田津矢子教授

嶋田津矢子教授記念号によせて

社会学部長 武田 建

昭和29年4月といえば、まだ社会学部が創設される以前である。文学部の社会事業学科に米国留学を終えて帰国されたばかりの津矢子先生が着任された。それまで故竹内愛二教授と杉原方教授のたった二人の先生だけだった学科が、津矢子先生の参加で急に陣容がととのい、大きく明るくなった感じがした。当時はまだ大学院の学生だった私たちにとっては、先生の加入は米国の学界の息吹を肌で感じとることができる、大きな知的刺激であった。私たちは、ことあるごとに、先生のところにお邪魔して留学時代のお話に耳を傾けたものである。こうした経験が、後に多くの学生が北米に留学する素地になったと深く感謝している。その先生が31年間にわたる長い学院での教育と研究のご生活に、定年のため別れをおつけになることは淋しいかぎりである。

津矢子先生は福岡県立福岡高等女学校から奈良女子高等師範学校家事科に進まれ、家政学を専攻された。ご卒業後女学校と青年学校教員養成所で教鞭をおとりになったが、太平洋戦争終了間もない昭和25年に米国のジョージア大学大学院で児童心理学を専攻なさり、マスターの学位を取得された。その後当時の恩師であるポーリン・ナップ教授の後を追うようにして、児童ならびに家族研究のメッカといわれたミシガン州デトロイト市にあるメリル・パーマー・インスティテュートで家族関係について、極めて学際的な研究をなさったのである。こうしたご研究の成果が後に社会学部における児童福祉論と性格発達論をはじめ、大学院における家族問題特殊講義の基礎になった。

関西学院大学における30余年にわたる先生のご研究は、ご主著「結婚カウンセリング」でもとりあげられているように、夫婦の人間関係にとどまらず、親子関係を含む家族についての臨床的研究と社会的な幅の広い考察が特徴である。また、臨床ないし治療的介入といったテーマのみならず、児童福祉をはじめ我が国ならびに諸外国の福祉制度、自殺、離婚、夫婦間の葛藤といった社会病理学的な現象、女性問題や老人福祉と非常に広い分野に渡っての論文を発表しておられることに心から敬意を表したい。幸いなことに、こうした諸論文は、関西学院大学研究叢書の一冊として、ミネルヴァ書房から「婦人解放と結婚の将来」という書名で出版される運びとなった。先生の新しい原稿も加えられていることに、頭がさがる思いであるとともに、心からお慶び申し上げる。

津矢子先生の想い出のなかで忘れることができないことは、同志社大学の嶋田啓一郎教授とのご結婚である。啓一郎先生は我が国社会福祉理論の重鎮であり、津矢子先生はそのご影響を当然受けて、極めて広い視点から家族関係を見つめることができる学者として独自の分野を開拓なさった。啓一郎先生も津矢子先生を通して、臨床的な福祉方法論に精通される機会が数多くあったと推察される。お二人で国内はもとより国外の国際学界に出席されるご夫妻を拝見するとき、公私ともに相互補足性と両立性で結ばれたカップルと尊敬とあこがれの念を禁じ得なかった。その具体化が、津矢子先生の恩師の一人クラーク・ムスタカス博士の共訳「個性と出会い」である。

多くの偉大な働きをしてこられた嶋田先生とお別れすることは悲しいことであるが、幸いご定年退職後も、先生は引き続き学部で講義を担当していただける。今後も先生の元気な顔を拝見できることはわれわれ一同の喜びとするところである。先生がご健康に恵まれ、いつまでもご活躍なされることを祈りたい。